
点心中華編

せみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

点心中華編

【Zコード】

Z5193D

【作者名】

せみ

【あらすじ】

こここの商店街以外で見ることの出来ない点心グループ系列の飲食店。舞台はそのうちの一つ『点心中華編』。出てくる料理はあんまり上手くないけども、コアな常連客がいればそれでいいと思つてゐる主人公と、もうすでにその考えが当たり前と思つてゐるヒロイン。点心グループ1の売り上げを目指して2人でがんばつていく物語。

『のんびり自転車をこげば、いつもの道でも違った風景に見えるはず。たまには何も考えずにぶらぶらするのもいいぞ。』

おじいちゃんがよく言つていた言葉だ。

小さい頃によく聞かされたせいか、暇なら家の前をぶらぶらする習慣が身についてしまった。

新しく引っ越してきた人には理解不能だつたに違いない。越してきて1ヶ月の間は、確実にかわいそうな子だと思つてゐに違いない。

そして今日。高校生になつてもぶらぶらする癖は直らず、ののりのりと自転車をこいで商店街のほうを散策しに来た。

この商店街は、市とか県が何かをしてもないのに、外国料理の店が沢山ある。

と、言つても、どの店も親会社が『点心グループ』という会社だ。しかしこの点心グループ系列。この商店街以外で見たためしがない。何を狙つている、点心グループ社長。この商店街じゃ収入の見込みがないぞ。

ちょうどそこは、『点心中華編』の店の前だつた。何度も外見だけは見てきたものの、いまいち店に入りたいとは思わないそのたたずまい。

ゆっくりこいでたから、アルバイト募集の張り紙が目に入つてき
た。普通に走つてたら、動体視力がよすぎない限り、まず見ること
の出来ない張り紙だらう。因みに自給は1000円と、かなり高い
と見受けられる。

せつかくの夏休みだし、自給のいいバイトでもして過いそうかと
のんきに考えていた矢先のこと。

目の前で、豪快に人がこけた。両手に持つていた買い物袋がくる
つと1回転して、無惨にも地面に叩きつけられた。その反動で袋が
パーン。ガラスの割れたような音がしたと思ったら、どうりとして
いる赤い液体が地面に広がつている。

さてどうしよう。自分的には、そこまで人が悪いと思わないので、
素直に助けよう。

すつと、転んだ人の前に手を持つていく。

「あの、大丈夫ですか？」

「あ・・・・・あ、ありがとうございます」

にこつと笑つて、どう見ても大丈夫じゃなさそうな女の人の手を
持つ。

その人は、ようやく立ち上がりつて軽い会釈をした。

そして、その人は気づいた。大惨事の惨劇を・・・・・

「つかぬ事をお聞きしますが、これは誰がやりましたか？もし犯人
を知つてゐるなら教えてください。速攻で締めてきますんで」
おおつと、これはどうした。カワイイ顔して腹黒つ。いやあま
つたく、いまどきの女子高生つて、こんな物騒な言葉を使うんだね。
勉強になりました。

「ああ、残念ながら犯人はあなたですよ」

「・・・・・・・・・・・・・・」

あつ、やべ。レツツ沈黙かよ。なんか地雷踏んだ？ここは『犯人

は私です。なんちゃって『風に吹き飛ばされたか?いや、これもまずいな。ああ、どうすればいいんだ?』

「ひつ・・・・・手伝いましょうか?」

いい案が浮かばず苦しい展開だが、ここはひとまずやつせの言動を忘れてもらひにしよう。なんか、サンタはいなべくらに夢を壊されたような顔されたしな。

「・・・・・・・・・・・・」

なんか、とてつもない何かに押しつぶされそうな、とにかくやばい。死ぬ? 死亡フラグ? 5W1H的に言えればWTFだよ。いやWTFか。嫌だよ、まだ死にたくないよ。下界つてこやーなー。

ほんとすみません。投了です。

「あつ・・・・・・あの、ありがとひゞやこます・・・・・・」

そうそう、そうやつてちんも・・・・・・つん?すみません、冤罪ですね。『めんなさい。ああもう、気を取り直して片付けしよ。

結局片付けるのに10分くらいかかってしまった。瓶系のものは苦労したものだ。

「ふう、やつと終わつたね」

「ありがとう。おかげでかなり助かつたよ」

「それじゃあ、今度は気をつけなきやね」

「ああ、ちょっと待つて」

おつとつと。そうやつて、人が自転車をはじめる前に肩をつかまないでくれるかな。今度は私がこけけやつから。つか、なに? 「お礼がしたいんだ。食べてかない?」

彼女が指したのは『つまでもなく』『心中華編』だった。

中華料理なんてめったに食べないせいか、メニューを読むのに一苦労。頼んだ料理は、かろうじて読めた麻婆豆腐。ここはシンプルにチャーハンといったかつたものの、「」飯類のページがよく分からなかつた。

そしてきた料理。オプションとしてこけた彼女がチャイナドレス姿で同席している。いまどきの中華料理店てのは、メイド喫茶風のおもてなしをしてくれるのか。勉強になりました。

「さあ、さめないうちに召し上がり」

催促されるがままに一口。・・・・・うん。なんと言えばいいのか。ストレートに言えば口に合わない。さて、ストレートに口に合わないといつたらどうなる？即死亡。はあ、どうしよう。

「あれれ。口に合わないって顔してるねえー」

そうですか。あなたは人の口口口を読めるんですね。すばらしい。でも今はその力発揮しないで。

「ううん、おいしいよ」

一気に2・3口食べる。さらには3口。無理に流し込んだが、気が緩むと戻しそう。

「大丈夫？ そんなに見栄張られて戻されるのも困るし」

なんなんだこの店は。店員らしき人はチャイナドレスだし、料理もはつきり言つていまいちだし。大丈夫か、点心グループ社長。

「ここ」の料理は日本人向けに作られてないからね」

「どういうこと？」

「だからね、この店は中国人の人が、地元の味を食べる場所なの。簡単に言えば、日本のカレーと本場インドのカレーとはぜんぜん違うでしょ。それとあんないじだよ。

日本人向けに改良された味じやなくて、本場の味をそのまま出している。それだけのことだよ」

なんか、分かつたような分からぬような。

それはそうと、この麻婆豆腐。どうすればいいのかなって考えない方がよさそうだな。今度こそやばそうだ。

第1回（後書き）

主人公>ふう、やつと1話が終わつたね。

こけた彼女>そうだね。それより・・・・・

主人公>ん? どうしたの?

こけた彼女>この『こけた彼女』つていうのやめてくれる?

主人公>それじゃあ、何がいいの?

現在名称考考え中の彼女>・・・・・・・・・

主人公>ホラね。こけた彼女がぴつたりじゃない

こけた彼女(仮)>うーん、なんかむくわれないなあ

主人公>そんなことより、この『点心中華編』は10話で完結らしいね。

こけた彼女(仮)>でつていう、ね

主人公>ごめん・・・・・

ようやく食べ終わった麻婆豆腐。大半は彼女がおいしそうに食べてくれた。

はいっ、と差し出された水。警戒心を持つて、まずはティースティング。うん、ふつうだ。ぐくっと一気に水を平らげる。ふう、生き返った。

「とこれでさ、ちょっと聞いていいかな？」

「うん、いいよ」

「無理なら断つていいからさ、その、ここでバイトしてみない?」
「」従業員が私を含めて2人しかいないに・・・

どんどん声が小さくなっていく。けなげつていいなあ。そう、私はそこまで人は悪くないんだ。引き受けてあげようではないか。

「うんいいよ。なんか困つてそうだしね。それに、ね」

本来ならこの後に、「自給も高いしね」とくるのだが、ここは胸の奥にそつとしまつておこう。

「えつ、ほんと? ありがとう」

潤んだ瞳に見つめられ、そのつえ手まで握られて。これこそまさに、神の祝福つて奴か。うん、ありがとう神様。千載一遇つていう四字熟語がピッタリつぽいな。

「ところでさ。何でチャイナドレス着てんの? まさか制服とか?」

「そのまさかだよ」

うつそ、マジック先輩。私も着るんすか、そのチャイナドレス。いや、一人称は私ですけど、一応男ですから。そんな趣味ありますんで。

「大丈夫だつて、男の子にはそれ相応の制服があるから」

ほつ。つとまで。また見透かされたか。たく、やるなおぬし。

「んで、いつからくればいい?」

「それじゃ早速だけど、明日の8時にはここに来てくれないかな」

「OK。それじゃ8時にね
「待ってるよ——」

現在時刻は7時45分。あの商店街に行くにはもう家を出でない
といけない時間だ。まあもつとも、とっくに家は出でつてるけどね。
そういえば、あの子の名前聞いてなかつたな。結構可愛かつたし、
名前もきっとかわいいだろ？

点心の前であの子が迎えてくれた。ヤツホーと手をぶんぶん振り
回して。朝からやけに元気だな。少しば見習わなきや。

「やあ、少し遅かったかな？」

「つづん、だいじょーぶ。それより、昨日聞き忘れたんだけじか、
君の名前は？」

そう、そう来ると私はすでに予想してたのさ。や、なんて答えるよ
う。普通に答えるか、はたまたちょっと面白おかしく言うか。と、
ここまで考えたものの、私にはそんな能力なんてナッシングなので、
ここはシンプルに普通で行こう。

「私の名前は結城或。^{ゆうきあるいは}結ぶ城に、或いはの或。因みの高校1年生。
ところで君は？」

「ふーん、結城或つていうんだ。勇氣があるつて捉えられるね。あ
つ、そうそう。^{ばたとといきへな}坂東菊音つていうんだ。よろしく、或クン」

「おおつと、いきなり名前ですか。焦りますねー、なんか。
「や、入つて入つて」

手を引っ張られて無理やり店内へ。傍から見ると、朝っぱらから
馬鹿じやねえの的に見えるけれども、これは拉致ですよアーキ。う
らやましがつたら負けって奴ですぜ。

昨日も見たけれど、店内は意外と綺麗だった。たぶん菊音ちゃんが、せつせと掃除してんだろうな。勝手な妄想だけど。

「んじゃ、ちょっと着替えてくるからそこで待つてね。或クンの

制服も持つてくるから」

脱兎のごとく駆けていった。文法的にあつてるか分からんけど、まあ気にしない。

そういうや、店長って誰だろ。今厨房にいるかな。いたら挨拶ぐらいしなきやか、人としての礼儀だと思うからな。

厨房の方を見ても人の気配なし。もしや、店長は氣を消せるのか？ 厨房に近づいても気配なし。今は買出し中とかか。うん、納得。

「或クーン、おまてせえ」

おお、主役の登場か。いやあ、ほんと菊音ちゃんがいるから、バイト始めたようなもんだしね。あと自給も高いか。

「はい、これが或クンの制服」

と、渡された制服。なんと言えばいいのか。もちろん、チャイナドレスではないのだが、なんだかなあ。中国武術の達人が着るような、カンフーの服かよ。似合わねー。マジやばいってこれ。

「まあ、お似合いよー」

と、菊音ちゃん。あなたが男だつたらぶつ飛ばしてるよ、もう。まあしかし、生地のさわり心地はいいね。さらさらして、意外と気持ちい。何の生地だろ？

「ああ、それね。それは確か……そつ、一応縄だつたはずだよ。シルク、シルク」

フーン、縄かあ、縄ねえ…………つて、まじっすか？やばいつて、私には一生縁のない物だつて。高嶺の花だつてこれ。

「さ、仕事仕事」

ああ、どつか行つちゃつた。たく、どうすりやいいんだよ。いくら見たつて縄には変わりない。いつそのことパクッちゃおつかな。仕事かあ、だるつ。はあ、バイト引き受けなきやよかつた。自給高いわりには客来ないしさ。やつてけんのかなこの店。裏では、暴

力団とかマフィアとかと繋がってたりして。うう、考えるだけで寒気がしてきた。

考えててもしょうがない。仕事内容知らないけど、なんかやるか。

第2回（後書き）

或へおめでとゝ歎詠ぢやん。

菊音へ???.なにか??.としたの?

兩音 > め、めい

菊音：ああ まだ本編は出てない店長まで いかないと、じたの？ なんかエヴァの26話みたいだよ？

或へまだ(一)かなしの?ほん名前たよ。

或ゝ昇進したんだよ。

菊音ハナ・か。何ナニでお元ハラきんのよヒ・たがいハタガイいを昇進ヒヂムして何ナニ。

菊音へちょまつ、なんなの

いやあ、じりやたまげた。ランチタイムのときの人の出入りが、ハンパなくやばかった。よくこの店の料理が食えるなあ、感心感心と。儲かってるんだからそれ以上のことは言わないけれど、コアなファンつていうのは怖いねー。

さらに驚きは続く。店長があまりにも普通なこと、店長だけ普通のコツクさんの恰好をしてること、不思議なことにお昼ご飯がこの上なく上手いこと、などなど。

しかしほんと、このお昼ごはんは感激しちまつたぜ。キャベツにもやし、ハムにベーコン、ニンジンかまぼこちくわに豚肉、ナルトにたまねぎ、その他いろいろを中華スープで煮て、そこにご飯を入れて10分くらい。仕上げに溶き卵をかけて、立派な雑炊の出来上がり。あつ、やば。思い出しただけでよだれが。これが冬ならなおかつたな。

ランチタイムがすぎて小休止。単純作業なだけに意外と疲れた。

「或クン、こちらが店長の椎名佑大さんだよ。料理も上手いし、奥さんも美人だし、なんかもうパーフェクトな存在だよ」

料理が上手いってのは何かあれだけど、なんと言つか柄にあつてるな。人に優しいってか、金貸してつていつたら貸してくれそうな感じ。ま、実際には言わないけどね。

因みに、このカンフースタイルにもなれてきた。しかしいいねーこれ。生地は滑らかで、肌触りがさらさらで、なんか欲しいなこれ。

さて、午後の営業。

6時ぐらいから客がちらほらと、店に吸い込まれるように入ってきた。また言うけど、「アなファンつて怖いっす。

注文数が多いのは、ラーメンプラス餃子のセット。6割がたこれを頼んでいくよ。次に多いのが、麻婆豆腐にご飯。いかにも通っぽい人は、麻婆豆腐の中にご飯を入れて食べてた。自分の中ではマーボーライスという名前になつた。

結局9時現在で、100人弱は客が来ただろ。言つちや悪いんだけど、意外と人気だな。味が微妙なのに、よくもまあ客が来るもんだ。そこまで安くもないし、隣には他の点心グループがあるので、わけわからん。

普段こんな仕事に慣れてないせいか、腕やら足やらが筋肉痛に。体力はあるほうだと思ってたけれど、疲労感がハンパない。

「おやおや、ずいぶん疲れてるみたいだね」

「うん、簡単そうに見えても意外と疲れるんだねこれ」

「まあ、初日つづるのはこんなもんだよ。私も始めた頃は、帰りフラフラだったもんね」

「フーン、そうなんだ。ところで、菊音ちゃんはいつからバイト始めたの？」

「高校は行つてからすぐからかな。今年の4月つてことね」

「と、いうと、3ヶ月半か。先輩だね、バイトの」

「バイトのつて、どういうことかな？」

「いやだつてさ、学年的には同級生じゃん」

「えつ、同級生なの？てつきり、2・3上かと思つてたよ」

「いやあ、意外だなあこれは。上級生に見えてたのか。ああ、なんか言わなきやよかつた。てか、いいねえ、こんな後輩がいれば。仕事もきつちりやってくれるし、何よりかわいいってのがいいね。これは自慢できるよ。特に自分のものじゃないけれど。

しかしこの疲労。明日に堪えそうだな。腕や腿の筋肉痛は、日常生活にも被害が及ぶからなあ。腕が痛くて何にも出来ないとかいつたら、マジでしゃれになんないしね。

さて、9時も回ったし、そろそろ帰るとするか。

と、言つても、まだ9時。人の出入りは衰えることを知らない。どうするか？ここで帰つたら、残りの客に菊音ちゃんが全て対応しなくてはならなくなる。彼女にとつては負担なはずだ。筋肉痛なんか跳ね除けちまえ結城或。お前はやれば出来るんだ。

いやあ、しかし、相手は菊音ちゃんだ。ここの一ヶ月は3ヶ月半。私から見りや結構な玄人だ。だいいち、私が来る前はそれ以前の客を菊音ちゃん一人で対応してたはずだ。とくに、私が消えてもさほど代わりはないだろう。いや、私がいたほうが邪魔か？足手またいか？

ああ、迷つ、迷つ。帰るか否か。受験以来の難問だな、これは。

「あのお、或クン」

ああ、くそう。帰りたいけど帰れない。目の前のものが取れないとおんなじか。うう、どうするよ、どうする？

「或クン！」

うわあ、びっくりした。てか、気づかない方が悪いのか。

「ごめんね。で、何か用でもあるの？」

「うん、そろそろ帰りの時間だよ」

あ、そつつか。用無しつすか。いや、本当に用無しか？まだやれるぞ。

いや、別にまだ大丈夫だよ。一人じゃ大変じゃない、この客の量は？

「それなら大丈夫だよ。9時から11時までの間は、店長の奥さんがやってくれるんだ。だいいち、或クンがいなかつたときは一人で

やつてたしね

あつ、そりなんだ。それじゃあ帰りますかね。

「ところで、この服はどうすればいいの？」

「その服は持つて帰つてね。そんでもつて、明後日持つてきて。明日の服はきつちんとあるから。」

更衣室で着替えてから外へ。空気が生暖かいな。やつぱ夏か。

「おまたせえ。そんじや、帰ろつ

「ひつちはくたくたなのに、菊音ちりやんは元気だなあ。

生温い風が吹いた。まだまだなあと、笑つかのよつて。

第3回（後書き）

或>いやあ、更新に時間がかかったね。

菊音>作者が受験生らしいよ。

或>なんだ。そりや、大変だね。

菊音>あれ?なんか冷たくあしらつてるね。作者はとくに、そういう系の属性つてのはないらしいよ。

或>いや、意味わかんないよ。

菊音>うん。私も意味わかんないから。でもなんで?

或>いやだつてさ、作者は受験生なんでしょう。これ執筆してる暇あつたら、勉強しろつての。

菊音>それもそうだね。でもなんか後味悪いなあ、今回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5193d/>

点心中華編

2010年10月15日22時23分発行